

■ヨーロッパ靴産業の現在③イギリス■

歴史と伝統で、年産500万足でも存在感を放つ

靴ジャーナリスト 大谷知子

ヨーロッパの靴産業についての連載は、今回で3回目となるが、イギリスを取り上げたい。

イギリスの靴と言えば、グッドイヤー。その産地はノーザンプトンだが、1990年代に起こった高級紳士靴への注目によって、消費者がノーザンプトンの名前を知りようになっており、実際に訪れる者さえいる。

靴産地ノーザンプトンは、どんなところなのか。そこから話を始めよう。

●クロムウェルのオーダーで始まった産地の歴史

ノーザンプトンは、ロンドンから北へ列車で約1時間のところ(地図参照)にある。ノーザンプトン州の州都だ。周囲には、ケタリング、ウェリンボローなどがあり、そこにも靴メーカーや靴関連施設があるが、例えば靴の研究・検査機関として著名なサトラは、ケタリングにある。

靴産業の発祥は、17世紀。1642年、清教徒革命で知られるオリバー・クロムウェルが、トーマス・ペンドルトンという人物が率いる、13人から成る靴職人グループに、600足のブーツと4000足の短靴をオーダーしたのがきっかけだった。アイルランドに送る軍隊のためのものだったが、オーダーを見事に完納。これ以降、ノーザンプトンの靴職人にオーダーが集まるようになった。

それだけの靴を作るには、素材、つまり



革が必要だが、ノーザンプトンでは大きな家畜市場が開かれており、原材料の確保は、担保されていた。

ただこの当時は、グループ化されていたとはいえ、職人各々は独立しており、それぞれの工房で製造していた。工場化が起こるのは、19世紀に入ってからだ。

ノーザンプトンを代表する靴メーカーの創業年を列記すると、以下の通りだ。

1829年	トリッカーズ
1873年	チャーチ
1879年	クロケット&ジョーンズ
1886年	ジョセフ・チーニー
1890年	エドワード・グリーン

ノーザンプトンの歴史を記した資料には、「1857年、靴製造用機械が初めてノーザンプトンに登場した」とある。

製靴用機械開発の歴史を追ってみると、まずアッパーを縫う製甲ミシン。ミシンの発明は18世紀末に始まるが、19世紀に入ると、イギリスとアメリカで次々と特許が申請され改良されて行く。1860年には、ポストミシンなどで知られる独・アドラー社が創業。また日本の記録には、1883年にドイツ製八方ミシンが輸入とある。ヨーロッパでは、それ以前に間違いなく導入されていた。底付けでは、1860～70年代のアメリカで、マッケイ式底縫い機、及びグッドイヤー製靴機械が完成した。

主要メーカーの創業年は、トリッカーズは早いですが、製靴機械の開発にリンクしている。

産業革命は、1760年代のイギリスで始まった。毛織物や鉄鋼などで手工業が機械による工場に取って代わる中、製靴機械の発明・開発が、製靴業の創業を促したことは想像に難くない。

そして20世紀に至ると、機械を導入した工場が完全に主流となる。前記メーカーのホームページに紹介されている1900年頃の工場風景は、現代の靴工場とさほど変わらない。当然、生産力は拡大。第一次世界大



トリッカーズの本社&工場



ノーザンプトンの靴工場街。赤いレンガづくりが特徴だ。

戦（1914～1918年）時、ノーザンプトンの靴メーカーは2300万足のブーツを製造し、最前線の兵士に届けたと言う。

こうして靴産地ノーザンプトンの基盤が作られ、現在のグッドイヤーウエルト靴の産地へと繋がっていく。

●ストリートシューズという、もう一つの顔

前項に記したトリッカーズをはじめとするメーカーは、グッドイヤー製法の高級靴を製造するメーカーだが、これとは違うゾーンの製造も、ノーザンプトン、延いてはイギリス靴産業の顔だ。

それは、ドクターマーチンに代表されるが、マーチンは、ドクターマーチン・ソールの使用を特徴としている。

同ソールは、ドイツ人の医師、クラウス・マルテンスが考案したものだが、空気を内包しクッション性に優れていることが特徴だ。

彼自身も、友人のヘルベルト・フンクと組んで、このソールを装着した靴を発売するが、それに着目したのが、ノーザンプトンの靴メーカー、グリッグス社だった。

グリッグスは、イギリスにおける特許権を獲得し、編み上げの作業靴として発売すると、そのクッション性ゆえに郵便配達、警官他、工場労働者に人気を博す。時は



ノーザンプトンの代表メーカーのショップが並ぶロンドンのジャーミン・ストリート

(撮影2010年)

1960年代だったが、この頃、イギリスでは労働運動が盛んだった。そのリーダーがドクターマーチンを履いていた。これをきっかけにロンドンのスキンヘッズ達に広がり、ドクターマーチンの靴は、反骨の象徴となった。さらに70年代、パンク・ムーブメントが巻き起こると、パンク・ロックのスター達が、ドクターマーチンを履いてステージに立った。

こうしてドクターマーチンは、サブカルチャーを象徴する靴となったが、イギリスの靴全体にサブカルチャーというコンセプトを与えることになり、若者文化と結びついた靴を生んだ。

“クリーパー”という厚いクレープソールを装着した靴も、その一つだが、元々は、ノーザンプトンの靴メーカー、ジョージ・コックス社が開発したもの。60年代にロックンロールと結び付き人気となったが、70年代に入るとパンク・ファッションのデザイナーであるヴィヴィアン・ウエストウッドが取り上げたことにより世界中に広まり、ストリート・ファッションの一面を形勢する靴となった。

このようにノーザンプトンには、グッド

イヤーの高級靴の一方で、サブカルチャーと結び付いたストリートシューズという顔がある。しかしドクターマーチンはグッドイヤーウエルト製であるし、ジョージ・コックスのクリーパーも、初期はグッドイヤー製だったと言う。製法は、伝統産地の面目躍如だ。

●南には、クラークス有り！

もう一つ、イギリスの靴を語るのに欠かせないメーカーがある。デザートブーツで知られるクラークス社だ。

クラークス社は、ノーザンプトンの靴メーカーではない。ロンドンから見ると、方角も逆。イングランド南西部サマセット州のストリートという町で生まれ、今も、そこを本拠としている。州内の著名都市に温泉で知られるバースがあるが、ストリートは、バースから南西に車で約1時間のところにある。

創業は、1825年。前記したノーザンプトンのトリッカーズより古い。作った靴も、ノーザンプトンのメーカーとは、全く違う。創業のアイテムは、シープスキンのスリッパだった。ストリート周辺は、羊や牛の牧畜が盛ん。創業者は、羊革や羊毛素材づくりを仕事としており、そこからスリッパづくりへと転換したのだった。

デザートブーツの生みの親は、クラークス家四代目のネーサン・クラークだ。第二次世界大戦時、兵役に就きビルマ（現在はミャンマー）に駐屯しており、その時に友達の兵士がインドで作ったという柔らかい革でできた、履き易そうな靴を履いていた。戦後、その記憶を頼りに創り上げたのが、デザートブーツだ。当初、イギリスでは評価されず、オーストラリアで発売。その後、アメリカで大ヒットし、世界に広まった。

またクラークスは、イギリス国内におい

表1: イギリスの靴産業

単位: 百万足

	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年
生産	4	5	0	5	6	6	5
輸出	53	88	115	144	162	195	215
輸入	553	455	574	586	679	749	745
消費	504	372	459	447	523	560	535

データ出所: World Footwear Yearbook (APICCAPS)

ては、子ども靴で大きなシェアを持っていることは、意外に知られていない。子ども靴の本格的販売は1950年代のことだが、足に合わない靴を履き続けると全身の健康に悪影響を及ぼすという認識に基づいており、4タイプの足幅を持ち、独自に開発した計測&フィッティング方法によって販売されている。

こうした一方で、生産のグローバル化にいち早く着手している。60年代には国外に工場を設立。筆者が取材した90年代末の時点で、生産委託工場は、アイルランド、ポルトガル、タイ、中国、ブラジルなど世界15工場に及んでいた。

しかし、これは単なる産地移転ではない。90年代半ばにポルトガルの靴工場を初めて取材した時、日産3000足、5000足という大工場は、必ず製品検査部門を備え、ソールの摩耗や温度変化による耐久性、また甲革の色落ちテストなどを自社で行っていることに驚いたが、後々、このシステムは、クラークスが海外工場に標準化したものであることが分かった。当然、クラークス本社は、研究施設を備え、前記のような製品テストだけでなく、フィッティング・テスト、足型調査など広範な研究を行っている。

以上から分かるのは、イギリスの靴産業は、300年以上に及ぶ歴史に培われた産地と製造力に裏打ちされた強いブランドに支えられているということだ。

●ノーザンプトンにもハイブランドの血

しかし、産業規模は確実に縮小している。業界団体の英国フットウエア協会(BFA=British Footwear Association)の会員数は、160社。コンサルタント業なども含み、製造業者だけではない。

また、表1「イギリスの靴産業」は、ポルトガル靴・関連業者団体APICCAPSが発行するデータ集「World Footwear Yearbook」から抜粋したもののだが、生産



ジャーミン・ストリートのジョン・ロブ(エルメス)
(撮影2010年)

表2:イギリスの上位輸出国(2016年)

	輸出金額 (百万USD)	金額 シェア	足数 (百万足)	足数 シェア
ドイツ	405	19%	35	16%
オランダ	315	15%	10	5%
アイルランド	298	14%	17	8%
フランス	228	11%	8	4%
イタリア	146	7%	22	10%

データ出所:World Footwear Yearbook 2017(APICCAPS)

量は、年間500万足、多い年で600万足。注釈がないので何を意味するか不明だが「0」という年もある。少なすぎる気もするが、BFAは「コアメンバーは、高級紳士靴を製造する20社余りであり、そのほとんどがノーザンプトンに所在する」としており、それからすると納得する数字でもある。

そして長い歴史を紡ぎ続けているノーザンプトンの老舗メーカーは、ただ伝統とブランド力だけで現在を維持している訳ではない。

エドワード・グリーンは、1990年代に破綻し、今は再生しているが、破綻した工場を居抜きで買い取ったのは、フランスのエルメス。自社の靴ブランド「ジョン・ロブ」のドレスシューズを中心とした工場とした。

ノーザンプトンにハイブランドの血が入った訳だが、2015年、アーティスティックディレクターにファッションブランド「1205」のパウラ・ジェルバーゼを起用した。女性であるが、サヴィルロウの老舗テイラー「ハーディ・エイミス」他で修業を積み、職人技を重視している。そのデザイナーが創る紳士靴コレクションは、伝統を踏襲しつつも新しい感覚を放っており、「ジョン・ロブ」がどう変化していくか、注目されている。

チャーチは1999年、次の世紀のあり方を

示唆するがごとく、プラダ・グループ入りした。目的はグローバル戦略の展開であり、21世紀に入った2001年にミラノとパリ、02年にローマとサンモリッツ、03年はニューヨークに出店。08年からは世界主要都市に次ぐ都市への出店に入り、ベニス、ボローニャ、

リーズ(イギリス)、エジンバラ、アジアでは香港、そしてシンガポール。さらに11年には初の婦人靴専門ブティックをロンドンのニューボンドストリートに出店した。

残るトリッカーズとクロケット&ジョーンズはというと、最も古いトリッカーズは、一昨年、創業以来、初めて創業家ではない外部の人間をマネージングディレクターに迎えた。

また、ドクターマーチンは13年、株式保有会社が投資ファンドに株式を売却。創業家が経営から離れた。クラークスも、既にクラーク家は経営に携わってはいない。

これで創業家による経営は、クロケット&ジョーンズだけになった訳で、伝統のメーカーは、新しい局面を迎えている。

またつい最近、クラークスは本拠地ストリートに工場を建設し、国内に生産を戻そうとしている。これも注目しなければならない。

●ブレグジットが、何をもたらすか

表1「イギリスの靴産業」が示すのは、イギリス靴産業が完全に輸外型であることだ。生産が500万足なのに対して輸出は2億1500万足(いずれも2016年)と、輸入したものを再輸出し、生産の40倍以上の量を輸出している。輸出先上位(表2参照)は、ドイツ、オランダ、アイルランド、フ

ランス、イタリア。5カ国すべてがEU加盟国だ。

当然、ブレグジット (Brexit)、すなわちEU離脱は、大きな問題となる。EU加盟国間の貿易は関税が掛からないので、離脱が実施されるまで無税だ。イギリス政府は、離脱交渉と並行して自由貿易協定の締結を進める方針のようだが、締結が実現できず、WTO(世界貿易機関)協定税率が適用されるとなると、アッパーが革製の履物 (HS番号6403) の関税率は、上位5カ国とも概ね8%だ。それだけ相手国市場での小売価格は高くなる訳で、輸出には不利となる。

イギリス靴業界は、ブレグジットをどう受け止めているのだろうか。ノーザンプトンの著名メーカーで働く日本人の知り合いに聞いてみた。

「離脱交渉は、これからであり、何も決まっていない状況。離脱後はどうなるかは言えないというのが、自分を含め大方の見方だ。ただ離脱をプラスに捉える向きもある。EUの政策に従うことなく、例えばアメリカ、日本などイギリスにメリットのある国と自由貿易協定締結交渉に入れるからだ」。

こんな答えが返って来た。

靴生産国ではなくなった今も、ドイツは3700万足、フランスは2200万足 (いずれも「World Footwear Yearbook 2017」) の生産があるが、イギリスは、わずかに500万足。それでも国際市場においてイギリスの靴は、ドイツ、フランスよりも存在感を放っている。

産業革命が起こった国だけあって、靴メーカーは、早い段階で近代化を果たした。また近代化が早かっただけに、いかに機械を導入するかという試行錯誤が、技術力を高めた。それによって市場における地



ジャーミン・ストリートの高級靴専門店フォスター&サン。2階にビスポーク部門がある (撮影2010年)



ジャーミン・ストリートのトリッカーズのウインドー (撮影2010年)

歩を固めることができた。それが、生産500万足でも存在感を放つ理由なのではないだろうか。

しかしそのメーカーも前述のとおり、ハイブランド企業のグループに入ったり、投資ファンドが経営に当たるなど、経営は

創業家から離れている。この状況は、経営が国際標準の下になされるということであり、伝統が継承されるかどうかは疑問が残る部分もある。そして、さらにブレグジットがどのように影響を与えるのか。それは現状では読めないところだ。

このようなイギリス靴産業に、日本が取り入れられる要素があるのか。歴史が違い過ぎて何とも言えないところだが、ビスポークの世界にならありそうだ。

イギリスでは貴族が今も存在する階級社会を背景に、ビスポーク靴店、すなわち手製による注文靴店が存在する。ロンドンには、ジョン・ロブ（エルメスのジョン・ロブとは異なる）を筆頭に数店あるが、ここで技術を身に付けた靴職人がサヴィルロウにビスポーク店を開き、さらにはケタリングに工場を設立。日本にも輸入されているが、この工場は、ケタリングでは100年振りの新規開設だったという。

日本では1990年代に靴職人が注目され、若い人たちが手製の技術を身に付けるため



ロンドン・セントジェームスにあるビスポーク靴店のジョン・ロブ

にイギリスに渡った。技術を修得後、帰国した者の中には、ビスポーク靴の工房を開いた者がおり、最近、海外からの注文も入るようになってきているが、この中から高級既製靴の動きが出ている。これが、イギリスのように工場設立といったことに至れば、業界に新しい方向を指し示すことになるのではなかろうか。